

1930年代の日本における「葉隠」の普及過程

谷口真子

The popularization of *Hagakure* in 1930's Japan

Shinko TANIGUCHI

Abstract

The early 18th-century text *Hagakure*, compiled by Yamamoto Jōchō and Tashiro Tsuramoto, is one of the seminal texts in bushido thought, and is particularly famous for the expression: “The way of the warrior can be found in death.” However, scholars have interpreted these sorts of phrases without considering the interpersonal relations between Jocho and Tsuramoto, neglecting political and social context unique to the Saga domain during the Edo period.

Hagakure consists of two parts: one is the advice from Jocho to Tsuramoto as retainers in service to their lord; the other is a series of historical anecdotes of Saga lords and retainers during the 17th century. The former part was published as the abridged version just after the Russo-Japanese War. Even after the publication of both parts of *Hagakure* during World War I, though, *Hagakure* was not much noticed, except for some persons who started researching *Hagakure* as an Edo-period source.

Remarkable military feats of Saga soldiers at Manchuria and Shanghai were the initial impetus and opportunity for the Japanese public to adopt the *Hagakure* spirit. Particularly “The Three Bombers”, who sacrificed their lives for the victory at Shanghai, were passionately admired because of their bravery and patriotism toward their nation even though they were not professional soldiers. Newspapers were eager to report all efforts to console their souls; movies and music dramatically expressed their courage in their honorable action, which greatly moved the ordinary people. One of “The Three Bombers” was from Saga. In Tokyo, a writer, Ōki Yodo, beginning in 1936, published a series of books introducing *Hagakure* in plain Japanese and popularizing *Hagakure* outside Saga area.

Characteristics of *Hagakure*, – military exploits of Saga soldiers, the strategy of affecting people emotionally with mass-media, the educational efforts to teach local patriotism, the passionate nationalism of the ordinary people, the education of the minds who demanded “Japanese ethos,” – all merged to remake *Hagakure* spirit as a special ethos for the Japanese people.

Under the political, social and cultural conditions that prevailed before and during the Pacific War, the *Hagakure* spirit was gradually accepted as something that all Japanese people, with their shared blood, should have.

はじめに

「葉隠」(1716年作成)は、佐賀藩士で二代藩主の御側仕えをしていた山本常朝が、御役御免となった田代陣基へ奉公の心構えを説いた部分と、佐賀藩の藩祖・藩主・藩士等の事績を記した部分から構成されている。その性格から近世においては秘書とされ、日露戦争後の1906年に抄録本、第一次世界大戦中の1916年に全集本が活字で出版された。

日本史や日本思想史分野における従来の「葉隠」研究は、常朝と陣基の人間関係や「葉隠」編纂の意図を無視して、太平洋戦争期の文脈で「葉隠」を分析し、主君への盲目的忠誠・滅私奉公を説いたものと解釈してきた。近世の文脈において「葉隠」が意味していたものが、明治期以降どのように読み替えられ受容されていったのか、各時代の政治的・社会的背景をふまえて明らかにすることによってはじめて、これまで意識していなかった戦後歴史学のもつバイアスが浮かび上がり、我々はそこから解放されるのである⁽¹⁾。

1930年代に入ると、日本人に特有の行動様式を支える精神を意味する「日本精神」という言葉が広く用いられるようになった⁽²⁾。とくに第1次上海事変が起きた1932年以後、「日本精神」関係書籍が次々と出版される。國學院大學教授の河野省三は、『日本精神発達史』（大岡山書店）を1932年に刊行し、実業之日本社による日本精神作興歴史読本シリーズ（1933年～1934年）、新潮社の『日本精神講座』第1巻～第12巻（1933年～1935年）、東洋書院の『日本精神研究』第1輯～第10輯（1934年～1935年）、金星堂の『日本精神文化大系』第1巻～第10巻（1934年～1938年）、大東出版社の『日本精神文献叢書』第1巻～第17巻（1938年～1940年）、文部省思想局、教学局、内閣印刷局による『日本精神叢書』第1巻～第67巻（1934年～1944年）、国民精神文化研究所編『国民精神文化文献』第1～第26（1936年～1942年）なども出版された。

これらのシリーズ本には「葉隠」の抄録すらみられない⁽³⁾。古代から連綿と続く天皇家とその国家の歴史という観点からみれば、朝廷の力が最も弱かった日本近世の武家政権下での、大名と家臣の主従関係を説いた「葉隠」は取り上げる対象とみなされなかったのであろう。南朝に功あった楠木正成や、中国に対する日本の優位性を主張した山鹿素行が注目されているのとは、対照的である。

しかし、満州事変・第1次上海事変における佐賀出身軍人の行動は、郷土が誇る「活躍」として認識され、佐賀では「葉隠」が「記憶の場」と「教育の場」で注目を集めるに至る⁽⁴⁾。東京でも「葉隠」の関連書が出されるようになり、「葉隠」は大名の御側で仕える奉公人としての心構え、という歴史的な文脈を超えて、古代から脈々と流れている大和魂・日本精神の発露として読み替えられていく。

本論では、1930年代に「葉隠」の存在が、いかなる過程を経て大衆に知られるようになり、さらに読み替えられていくのか、主に「葉隠」を発見・普及させていく側に注目して考察する。

第1章 満州事変・第1次上海事変における佐賀出身軍人の行動と社会の反応

(1) 「爆弾三勇士」に対する社会の反応

すでに世間は、満州における古賀連隊長の戦死に沸いていた。佐賀中学、陸軍士官学校卒の古賀伝太郎は日露戦争に出征した経験をもつ。1932年1月9日に錦西で戦死して大佐に進級した⁽⁵⁾。

『東京朝日新聞』からは当時の雰囲気が垣間見える。戦死は1月11日朝刊で伝えられ、翌日には「全軍死すとも、一步も退くな！」大和武士の精華を示し憤死の古賀連隊長」という見出しがみえる。その後の告別式、

(1) 拙稿「没我的忠誠論の再検討—『葉隠』新解釈の試み—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第56輯（2010年度）（2011年）、拙稿「読み替えられた『葉隠』—その刊行と受容の歴史—」『早稲田大学高等研究所紀要』第9号（2017年）。

(2) 「日本精神」『国史大辞典』。「葉隠」の受容史を論じるのが本論文の目的なので、日本精神の研究史には触れないが、近年の日本精神・日本主義研究については『岩波講座 日本の思想 第1巻 「日本」と日本思想』（岩波書店、2013年）などを参照。和辻哲郎『岩波講座 東洋思潮 [東洋思想の諸問題] 日本精神』（岩波書店、1934年）は、国民的自覚が幕末の「大和ごころ」「尊皇攘夷」、日清日露時代の「大和魂」「忠君愛国」を経て、当時の「日本精神」に表現されているとし、これらがみな保守的とされる理由を考察している。なお1932年～1939年の『東京朝日新聞』の見出しや書籍広告にみえる「日本精神」は149件で、1932年は3件、1933年は10件、1934年は6件、1935年は30件、1936年は21件、1937年は25件、1938年は30件、1939年は24件であった。本論文で使用する『東京朝日新聞』の記事は、すべて朝日新聞記事検索データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」による。

(3) ただし、『日本精神研究 第1輯 日本精神論』（東洋書院、1934年）では、橋本実「近世に於ける武士道の発展」が2頁ほど「葉隠」に言及し、四誓願を紹介している。

(4) 拙稿「一九三〇年代の佐賀における「葉隠」の顕彰と学校教育—「葉隠」をめぐる「記憶の場」と「教育の場」—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第63輯（2018.3）。

(5) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 [第2版]』（東京大学出版会、2005年）。以下、『日本陸海軍総合事典 [第2版]』と略す。また陸軍士官学校は陸士、陸軍大学校は陸大と略す。

合同葬ほか、未亡人の状況も報じられた。2月29日には、「古賀連隊長の夕」が報知講堂から全国にラジオ中継された記事が載る。歌人・国文学者で、唱歌「夏は来ぬ」の作詞でも知られる佐佐木信綱が作詞、岡野貞一が作曲した合唱「古賀連隊長」、琵琶「軍神古賀連隊長」（大坪草二郎作詞・高峰筑風作曲）、浪曲「噫古賀連隊長」（大西吞洲作詞、東家楽燕作曲）なども演奏された。古賀を顕彰する顕揚義会が静岡県で組織され、小冊子『嗚呼古賀連隊長』が編まれたのにもない、佐賀で発行される『肥前史談』では、そこから抜粋した内容を9回に分けて紹介している⁽⁶⁾。

古賀連隊長の戦死から1ヶ月半ほどして、第1次上海事変における「爆弾三勇士」（以下、「三勇士」と表記）が一気に注目を集める。教育総監部編『満州事変軍事美談集』（精神教育資料第四三号増補一号、1933年、全3冊）の「責任観念之部」にある「点火せる破壊筒を抱き、身を以て鉄条網を破壊す」と題した一文が、のちに第5期「1941～45年」国定教科書の国語の「三勇士」の原拠になったことでも知られる⁽⁷⁾。

「三勇士」の北川丞と作江伊之助は長崎県松浦郡、江下武二は佐賀県神埼郡出身である。江下は高小卒の炭坑夫で1931年1月、現役兵として入隊し、翌年、下元混成旅団に属し、上海に出征して戦死し、特例により他の2人と同じく伍長に進級した⁽⁸⁾。

廟行鎮の鉄条網を爆破するために自分の命を犠牲にした行動として、全国が盛り上がった様子は、『東京朝日新聞』に載った「三勇士」関連記事からうかがえる。1932年2月22日に爆死した事件は、2月24日の朝刊に、「[帝国万歳]と叫んで吾身は木葉微塵 3工兵、点火せる爆弾を抱き鉄条網へ躍り込む」という見出しで報道され、「九州男児の肝の太さ」が強調された。その後、新聞には次々と関連記事が登場する。日比谷小学校2年生が書いた感想文が掲載され、遺族慰問義金が1万円を超え、両陛下が感激したとの記事が載り、「働いて死んで来い 犬死はするな」と言って送り出したという、北川の母親の言葉が、「軍国2代的美談」として紹介された。3人の伍長昇進が決まった翌日には「3勇士追悼会」の記事が載った。東京に到着した「三勇士」の遺族が、荒木陸軍大臣より祭料を受け取ったことも報道された。

3月9日の夕刊には「勇士劇時代 爆煙にむせびつつ、観衆「万歳」絶叫」とみえ、興行界の興奮が伝わってくる。東京日日新聞社と大阪毎日新聞社は、「爆弾三勇士の歌」の歌詞を懸賞募集した。朝日新聞社の「肉弾三勇士の歌」懸賞募集には、124000通の応募があり、一等当選者は与謝野寛（鉄幹）であった⁽⁹⁾。

小学校では学芸奨励会で、高等科の学生が旅団長以下に扮し、東京の劇場は決まっていた上演狂言を差し替えて芝居を催した。琵琶や浪花節はもちろん、長唄で「肉弾散華」が公演された。ブームに便乗した者も多かったようである。三勇士髷という一風変わった洋髪が考えられ、長襦袢や子供の衣類に日章旗や軍艦、飛行機の模様が入り、ネクタイやハンカチにも海軍旗や日章旗がかたどられた。爆破筒を「はちく筒」、鉄条網をゴボウと大根、鉄兜をクワイなどで細工した、「爆弾三勇士」と名付けた料理や、「爆弾キャラメル」「爆弾チョコレート」まで登場した⁽¹⁰⁾。

『キネマ旬報』からは、「三勇士」の映画が次々に制作された様子がうかがえる。警視庁興行係による軍事映画の調査結果によると、満州事変以来、3月5日までの間にニュースが1900本余り、劇映画が約600本制作され、1日の検閲が11万2618メートルに達し、9人の検閲官が早朝から夜11時頃まで作業にあたったらしい。「戦争映画中の最大人気物たる「肉弾三勇士」になると各方面からの個人注文で映画業者福々の有様、したがって検閲所へ持込まれた戦争映画中の主たるものはやはり三勇士ものである」とみえる⁽¹¹⁾。

しかし、それらの評価はいずれもかんばしくない。赤澤大助監督「昭和の軍神 爆弾三勇士」（赤澤映画）、

(6) 1932年5巻10号～1933年6巻8号の「嗚呼古賀連隊長」(一)～(九)。

(7) 中内敏夫『軍国美談と教科書』（岩波新書、1988年）。「三勇士」については、陸軍工兵中佐の小野一麻呂『爆弾三勇士の真相と其の観察』（1932年、自費出版）など、何冊も書籍が刊行された。詳細は上野英信『天皇陛下萬歳 爆弾三勇士序説』（筑摩書房、1971年）。

(8) 『日本陸海軍総合事典 [第2版]』。

(9) 小笠原長生『忠烈爆弾三勇士』（実業之日本社、1932年）301～302頁。

(10) 同上、88～92頁。

(11) 『キネマ旬報』430号（1932年3月21日号）5頁。

古海卓二監督「忠烈肉弾三勇士」(東活映画)、福井信三郎監督「昭和軍神 肉弾三勇士」(福井映画)、石川聖二監督「肉弾三勇士」(新興映画)など映画は10本以上制作されたようだが、「肉弾三勇士の映画化と云ふ丈で観客は来る」「際物的のものだから、早く出せば当らう」「一時は肉弾三勇士を上映せずんば映画館に非ずと云つた風景が映画街を埋めた。時節柄絶好の添物である」など、批評家の目は厳しい⁽¹²⁾。先にあげた古賀連隊長については、井出錦之助監督「錦西の血陣 古賀聯隊」が、関東軍司令部原作のもと、騎兵連隊・歩兵連隊・輸送監視隊の特別出演により、実地のロケも行って制作されていた⁽¹³⁾。古賀連隊長、「三勇士」は時の人であった。

同年4月には、定価80銭で小笠原長生『忠烈爆弾三勇士』(実業之日本社、1932年)が刊行された。海軍中將で子爵の小笠原は、唐津藩主・幕府老中小笠原長行の長男で、1887年に海軍兵学校を卒業し、日露戦争では軍令部参謀をつとめた。1911年～1915年は学習院御用掛も兼務し、海軍中將になったあと予備役を経て、1921年から宮中顧問官の任にあった⁽¹⁴⁾。

本書には、元帥海軍大將伯爵の東郷平八郎が題字「忠烈泣鬼神」、陸軍大臣の陸軍中將荒木貞夫と陸軍大將鈴木莊六が序を書いている。東郷の題字のあとには「三烈士」の肖像写真、廟行鎮に建てられた碑(卒塔婆)、破壊筒の模型など、先に紹介した新聞記事の風景が写真や画像で紹介されている。中内敏夫は、「出かせぎ型の地域主義」——一人でも多くの人材を、地域から中央政・官・財・学界に送りこむことこそが、結局のところ地域の地位を重からしめることに通ずるといふ論法——が、小笠原の「三勇士」売り込みの論法にも現れていると論じている⁽¹⁵⁾が、社会がこれほど熱狂したのは、国民皆兵のもとで、「一般民衆でも陸士・陸大卒のエリート将校顔負けの活躍ができる」、と受け止められたことによる。

新聞などのメディアや軍部によって、民衆が一方的に扇動されたというよりは、「三勇士」にあやかった興行や商売が東京を中心に流行し、それを人々が生活のあらゆる場面で楽しんだと言うべきだろう。しかし、一般大衆と、陸海軍人や当時の識者たちとは、受け止め方が異なる可能性もある。そこで次節では、『日本及日本人』特集号をとりあげ、当時の識者たちの考え方をみてみたい。

(2)『日本及日本人』にみるさまざまな識者の考え方

『日本及日本人』は、1907年から1945年まで、政教社から出版された雑誌で、その成り立ちからして国粹主義的色彩が強いのだが、「爆弾三勇士留魂号」と銘打った特集号の第245号(1932年3月15日発行)にも、「葉隠」の文字は見当たらない。「爆弾三勇士に対する感想」と題して、陸海軍人や学者、文学者など67人が、50頁にわたり意見を載せているので、次にいくつか紹介しよう。以下、文末註は煩雑なので該当頁を本文に記す。

陸軍中將菊地武夫は東京駅に軍神祠堂を建立し、全国の要地に三軍神の碑を建てる案(57～58頁)、陸軍中將堀内信水(文次郎)は、二重橋前の楠木正成の像に相對して、3人合同の銅像を建てる案(65～66頁)、陸軍中將奥平俊蔵は、関門海峡に西アジア大陸を臨む銅像を建てる案(66頁)を出した。陸軍少將多賀万城は、外国人の東京特派員が書いた記事を紹介し、支那民族思想、欧米一般民族思想と較べ、日本民族思想は、己を犠牲にしても他を救う精神が根本にあると述べた(53～54頁)。

海軍中將竹内重利は氏神の祀側に併祀し、小冊子を全国の学校、在郷軍人会、青年団などに配布し、さらに退役軍人などを派遣して全国で講演させる意見(56頁)、海軍中將浅野正恭は一大梅林を作り、そこに祠と碑文を建て、勇士爆死の季節ごとに彼等を偲ぶ意見(69～70頁)、海軍少將匝瑳胤次は神社、記念碑を建立する意見(58～59頁)を表明した。海軍中將上泉徳弥は、「三勇士を祀る以前に日本国民は一人漏なく絶対不撓の精神を以て、最後の一人となるまで戦ふの決心をなし、完全なる勝利を得て三勇士を瞑せしめざるべからず」

(12) 『キネマ旬報』431号(1932年4月1日号)105～107頁。

(13) 『キネマ旬報』432号(1932年4月11日号)67頁。

(14) 『日本陸海軍総合事典[第2版]』。

(15) 中内敏夫『前掲書』81～82頁。

(93～94頁)と述べ、海軍少佐中嶋武は、日清・日露でも壮烈な戦いで国に殉じた軍人は枚挙に暇が無いが、戦況が不利に陥っても国民は忍耐力・持久力を持って軍隊を後援しなければならない、と注意を喚起した(75～77頁)。

陸海の軍人とは対照的に、識者たちの見解は、社会の熱狂ぶりの延長線上に位置していた。伯爵柳原義光は、簡単かつ一般に流布して効果がある方法として、「三勇士」肖像の記念切手を発行する案(56頁)、佐々木安五郎(照山)―山口県出身で『台湾民報』主筆となり、のち内蒙古を探検して「蒙古王」の異名をとった―は、三人の姓がいずれも水に縁があることから、東京湾中の旧砲台に水上公園を設け、そこに彼等の銅像を建て、毎年爆死の時刻に万歳を唱える案(56～57頁)、酒井勝軍―山形生まれで渡米し、日露戦争では観戦外国武官接待係、シベリア出兵には通訳として従軍―は、明治神宮外苑に廟行鎮での鉄条網破壊の風景を大模型にして建造する案(67頁)、口語自由詩運動をすすめた、明治～昭和時代の詩人・国語学者の服部嘉香も、靖国神社大鳥居前に三勇士の銅像を建て、アメリカを攻撃する飛行機3機を製造し、「江下号」「北川号」「作江号」と命名する案(98～99頁)を示した。

これらの意見が「三勇士」の顕彰方法を提言したのに対し、中島利一郎―のちに東洋比較言語学者となる―は、「国定教科書や青年読本に入れて、永久に活きた教材とすべきだと思ふ」(92頁)と述べ、民間教育界で活動した曾根松太郎は「所詮、人を動かす力は身分の高下でも無い、月給の大小でも無い、唯、其の人の力により精神に存するのである」(88～89頁)と主張して、精神の重要性を説いた。

同じ立場はほかにもみられた。詩集「天地有情」で知られる土井晩翠は、靖国神社の近くに三勇士の像を建て、国定教科書に載せる案を出しながらも、「三勇士を永久に祀る(記念する)最上の方法は、日本人たるものが永久に三勇士と同様の精神を抱くことである」(95頁)と述べている。『滿蒙政策更新論』(中日文化協会、1927年)などを著した山田武吉は、「大和魂とは要するに超科学的精神力に外ならぬ。科学的技術や科学的理論を無情視する欧米物質文明の中毒病者よ、科学は万能ではない、技術よりも精神、理論よりも信念、それが人間を偉大ならしむるのであると覚れ」(79頁)、と精神や信念を強調した。

「三勇士」の精神を強調する論考はほかにもあるが、不思議なことにそのいずれでも「葉隠」の文字は見当たらない。学習院教授を経て、1932年から国民精神文化研究所所員をつとめ、戦後公職追放されることになる紀平正美は、『日本精神』(岩波書店、1930年)の著者であり、のちに『葉隠講話』(有精堂、1943年)の編者ともなるが、この段階では「葉隠」という言葉すら出していない(55～56頁)⁽¹⁶⁾。堀口久萬―堀口大学の父で外交官、漢詩人、随筆家―は、「豪勇壮烈無比な犠牲的精神こそ日本民族特有の靈魂の現はれ」と評価し、菅原伝授手習鑑、伽羅先代萩、吉良邸討入り、藤田東湖の正気の歌などにふれているが、「葉隠」については何も述べていない(51～52頁)。

以上、紹介した人々を含め、『日本及日本人』の特集号で、「葉隠」や葉隠精神に言及した寄稿文は1本もないのである。「三勇士」のうち、江下一原籍地は佐賀藩の支藩(蓮池藩)―は唐津藩領育ちだが、唐津藩主の子であった小笠原長生ですら「葉隠」に言及していない。彼は「三勇士」には日本魂が胸底深く培われていると述べているが、それを「日本武士道」と表現するのみで、「葉隠」とは関連づけて考えていないのである。当時の有識者の間で、「葉隠」や葉隠精神はまだ受容されていなかったと考えられよう。

その点で興味深いのは、1932年2月25日の『大阪朝日新聞』「天声人語」が、「葉隠」に注目していることである。「三勇士は最も明白に佐賀色を体現した。佐賀色の近き淵源は鍋島藩の「葉隠れ教育」にありとみるか」と言及し、「葉隠」の精神が「三勇士」に体現しており、地方の異色というより日本としての誇りであると論じているのである⁽¹⁷⁾。『肥前史談』1932年5巻3号は、「葉隠精神の発露」と題してこの天声人語を紹介し、「郷土出身の勇士が葉隠精神を発揮して壮絶無比の行為に出でたことは大なる郷土の誇りである否な国民全体の誇りである」と讃えている。そこに起きたのが、翌3月の空閑少佐自決であった。

(16) 本書は、紀平正美「葉隠の哲学」を収録した西田長男編『葉隠講話』(有精堂出版部、1942年)を、紀平正美等編として翌年同じ出版社が刊行したものである。

(17) 上野英信『前掲書』。

(3) 空閑少佐の自決

佐賀出身の空閑昇少佐は、「葉隠」愛読者であった。1910年陸士卒でシベリア出征を経験し、1930年歩兵第7連隊大隊長となった。1932年2月、第1次上海事変に出征するが、人事不省に陥って敵側の捕虜になったため、帰還して後始末をしたのち、3月28日に部下が戦死した場所でピストル自殺した⁽¹⁸⁾。

映画界の反応はまたも早かった。『キネマ旬報』433号(1932年4月21日号)～435号(1932年5月11日号)から、松石修監督「武人の精華 空閑少佐」(新興映画)、河合撮影所「大和魂空閑少佐」(河合映画)、佐々木恒次郎監督「嗚呼空閑少佐」(松竹蒲田映画)、赤澤大助監督「散りゆく大和桜 空閑少佐」、大庭喜八監督「嗚呼空閑少佐」(東活映画)などが制作されたことがわかる。ところが、以後の『キネマ旬報』には、「三勇士」ものや「空閑少佐」ものは登場しない。一斉に映画が作られたものの、単なる流行で終わってしまったのである。

しかし、1934年に刊行された中村郁一編『鍋島論語葉隠全集』改撰5版(佐賀郷友社)の表紙には、「葉隠士風を尊崇躬行して、終に昭和七年三月二十八日支那上海江湾鎮の戦跡に於て、上官及部下の英霊を弔ひ、自らの道徳律に則りて、父祖伝来の武士道に殉じ、日本武人の精華を中外に宣揚せし、故陸軍歩兵少佐空閑昇君の事績を輯録して、慰霊の誠を捧げ、併せて江湖に本書の普及を図り、以て遺烈を千秋に俾ばんとす。昭和九年一月 中村郁一」とみえ、空閑少佐追悼の書としている。本書には空閑少佐の略伝、1932年5月14日「佐賀日報」に掲載された、閑院宮参謀総長と荒木陸軍大臣の弔辞、『キング』(1932年7月号)に掲載された真山青果作「空閑少佐」の摘録、指揮官松下大尉の手記などが追加されている。

編者の中村は、弾丸が飛び交う戦闘の絶頂では人は無我の境地にあり、無二無三に敵陣に突進して命を落とすのはさほど難しくないが、戦闘が終わって平静に戻ったあと、改めて死ぬ事は至難の業であると指摘する。また空閑少佐の自決について、社会が恩賞、進級、靖国神社への合祀など、名誉の戦死者と同等以上の恩典を求めているにもかかわらず、国がいまだ対応していないことにふれ、少佐の遺烈は「大和民族の心霊上の一大指針として、千古に不言の教訓を垂れ」るものと断言している(1934年1月2日付け)⁽¹⁹⁾。

第2章 「葉隠」の主体的学び

(1) 空閑少佐愛読章句の紹介

佐賀県ではこの3つの事件に影響を受け、同年11月に石田一鼎、山本常朝、田代陣基の三人の功績を讃えるため、肥前史談会主催で葉隠三哲慰霊祭と記念展覧会が開催され、3年後には、栗原荒野が『分類註釈 葉隠の神髄』(葉隠精神普及会、1935年)(以下、栗原『葉隠の神髄』と略)を刊行した⁽²⁰⁾。これらの行事や書籍では、佐賀の葉隠精神には日本精神(大和魂)が深く息づいているという考え方が明確だが、それは観念的主張ではなく、佐賀出身の軍人たちが戦場で見せた実践にもとづく主張であった。

記念展覧会には、空閑少佐愛読書として、遺族の空閑正尚が葉隠を出品した。これは赤鉛筆で傍線が引いてある抄録本で、栗原荒野はこの愛読抄録本から、線が引かれた部分をまとめ、古写本と照合して「空閑少佐愛読葉隠章句写」を同じ記念展覧会に提出した。栗原はこれを『葉隠の神髄』に収録し、さらに栗原本を参考にした大木陽堂『葉隠論語』(教材社、1936年)も、空閑少佐が愛読していた部分を紹介している。実際の戦闘におもむく軍人が、「葉隠」のどのような箇所に関心があるのかを明らかにするため、栗原本収録部分より【表1】を作成した。いずれも「葉隠」の聞書一・二に収録されている文で、武士の心構え、とりわけ主君の御側に仕える者の心得を説いた部分である。栗原『葉隠の神髄』は、「葉隠」をその内容から四誓願篇、一般修養篇、実話逸事篇、史蹟伝説篇に分けて抄録した作品で、空閑が傍線を引いた29項目は、栗原本では四誓願篇と一般修養篇に収められているものばかりである。①②③⑫⑮などは「葉隠」の中でも有名な章句である。

(18) 『日本陸海軍総合事典 [第2版]』。

(19) 空閑は1934年4月に靖国神社に合祀された。

(20) 栗原荒野は1933年、『葉隠の神髄』を自家出版しているが、これは同年7月に、佐賀高等学校での文部省主催歴史夏季講習会茶話会で行った講演と、同年8月に佐賀県師範学校附属小学校主催労作教育講習会で行った講演の概要で、20頁足らずのものである。

【表1 空閑少佐愛読葉隠章句一覽】

(出典：栗原荒野編著『分類註釈 葉隠の神髓』(葉隠精神普及会、1935年) 46～50頁)

番号	空閑少佐愛読葉隠章句	栗原荒野編著『分類註釈 葉隠の神髓』の参照箇所
①	武士道と云ふことは、即ち死ぬこと、見付けたり。凡そ二つ一つの場合に、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわつて進むなり。若し凶にあたらぬとき、犬死などと云ふは、上方風の打上りたる武道なるべし。二つ一つの場合に、凶にあたることのわかる事は、到底出来ざる事なり。我人共に等しく生きる方が、万々望むかたなれば、其の好むかたに理がつくべし。若し凶にはづれて生きたらば、腰ぬけなりとて、世の物笑ひの種となるなり。此のさかひ、まことに危し。凶にはづれて死にたらば、犬死気違ひとよばれるれども、腰ぬけにくらぶれば、恥辱にはならず。是れが武道に於てまづ丈夫なり。毎朝毎夕、改めて死ぬ死ぬと、常住死身に成つてゐるときは、武道に自由を得、一生落度なく、家職を仕果すべきなり。	卷一、四誓願篇武士道二
②	奉公人は、一向に主人を大切に歎くまでなり。	卷一、四誓願篇忠節九
③	武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲を片荷にして、二六時中、肩の割り入るほど、荷うてさへ居れば、侍は立つものなり。	卷六、四誓願篇総論三
④	成富兵庫が申されしに、勝と云ふは、味方に勝つ事なり。味方に勝つと云ふは、我れに勝つ事なり。我れに勝つと云ふは、氣を以て体に勝つことなり。平素味方数万の士に、我れに続く者なき様に、我が心身を仕なして置かざれば、敵に勝つこと能はぬものなり。げにさるることこそ。	卷七、四誓願篇武士道六〇
⑤	劍術の要は、種々あれども、心に銘すべきは己れは皮を切られて骨を切ることなり。無分別の様なれど、元来無分別にならざれば、勝利は覚束なきものなり。	卷十一、四誓願篇武士道四三
⑥	古来大酒にて不覚を取りたる人多し。甚だ残念の事なり。我が酒量をはかり、其の度を過ぎぬ様、心掛肝要なり。(注：傍線はなく上に赤〇)	卷一、一般修養篇風尚嗜好一四
⑦	又役など仰せつけられし節、内心に嬉しく思ひ、自慢の心などあれば、其の儘、面にあらはるるものなり。こは甚だ見苦しきものなれば、よく喜怒をつつしむべきものなり。	卷一、四誓願篇忠節六九
⑧	見解高くなり、理屈好きとなるものなり。戒むべき事なり。ただ学問は、我が身を修むる為めに、心掛くべきなり。	卷一、一般修養篇反省自戒六
⑨	凡そ武士は、勇み進みて、物に勝ち浮ぶ心を肝要とす。しをたれたる気風にては、用に立たざるなり。	卷一、一般修養篇克己忍耐三
⑩	凡そ常には広言を吐く人も、事に臨んでは却つて畏縮する人多し。武士たる者は、平素は朴訥にして事に当つては剛毅果敢なるべし。	卷一、一般修養篇其他雜事三八
⑪	過つて改むるに、憚なかれといへり。されば、過ちとさたらば、聊も猶予なく改むべし。さすれば過ちは忽ち滅するなり。過ちと知りつつこれをまぎらかさんなどとするは、愈々以て卑劣千万に見ゆるものなり。朴訥の美風は、ここにあるものなり。	卷一、一般修養篇反省自戒二一
⑫	案ずるより、生むがやすきなり。死の道も同様なり。平生に死を覚悟して、心のどかに死すべきことなり。	卷一、四誓願篇忠節一五
⑬	人の心の厚薄を見んと思はば煩へと云ふことあり。日比は懇意にして寄り合ふものが、一旦病氣災難等の際には、疎略にして取り合はぬ者は腰抜けなり。凡て人の不孝變事の際には、とりわけて立ち入り、世話を焼くべきものなり。恩を受けたる人には一生疎遠になすべからず。斯かることより、人の心の中は見ゆるものなり。我が難儀のをりは人を頼み、後には思ひも出さぬ人多し。よく慎むべきことなり。	卷一、一般修養篇礼讓和親四
⑭	事に臨んで勘定を第一義とする人はスクタレ者なり。	卷一、一般修養篇其他雜事三
⑮	武士道は死狂ひなり。本氣にては大業はならず。氣違ひになつて死狂ひするまでなり。武士道に於て分別出来くるときは、早後るるなり。忠も孝も差別なく、此の二つの道に於ては、死狂ひなり。此の中に、忠孝は自らこもるものなり。	卷一、四誓願篇武士道四

⑯	又行くか行くまいかと思ふときは、行かざるをよしと、此の追加に、喰はうか喰ふまいかと思ふときは、喰はぬがよろしく、死なうか死ぬまいかと思ふ時は、死ぬをよしと。	卷一、一般修養篇其他雑事一五
⑰	諫言、異見なども悪事の出来てよりなしては、其の驗ありかぬのみならず、却つて悪名をひろげ申す様なものなり。病気に罹つてより薬を用ゐるが如し。	卷二、四誓願篇慈悲二二
⑱	唯御家中、下々までの為めになる様にと思ひてするが上への奉公なり。	卷二、四誓願篇慈悲二二
⑲	又人を先に立つべし、決して争ふ心なく、礼儀を乱さず、へり下りて我が為には悪しくとも、人の為めによき様にすれば、いつも初参会の様にて、仲悪しくなることなし。	卷一、一般修養篇礼讓和親三
⑳	何事も、人よりは一段立上りて見ねばならず、然らざれば同じあたりにグドつきてガタヒシと当りあひになる故、ハツキリとしたることなし。	卷一、一般修養篇修行鍛錬一四
㉑	仕合せよき時、自慢と奢が危きなり。	卷一、一般修養篇克己忍耐一一
㉒	痛さこらふる事なり。苦をこらへぬは皆悪しきことなり。	卷一、一般修養篇克己忍耐一
㉓	又科人を悪しざまに云ふは、不義理なることなり。又仕合せよき人には無音しても苦しからず、落ちぶれたるものには随分不便を加へ、何とぞ立直す様に致しつかはすこと、武士の義理なり。	卷一、四誓願篇忠節三一
㉔	不仕合せのとき、草臥るるものは、役に立たざるなり。	卷二、一般修養篇克己忍耐八
㉕	大難大変に遭遇しても、毫も動ぜぬと云ふは、まだしきことなり。大変大難に遭つては周章狼狽せざるは勿論、却つて歓喜雀躍して、進み勇むが武士なり。これ、一難間を越えたる所なり。諺に「水増されば船高し」	卷一、一般修養篇克己忍耐二
㉖	平生は兎角なれども、人の落目になり、難儀する場合は、飽くまでも親切を尽くし、いたわるものなり。	卷一、一般修養篇礼讓和親五
㉗	懇に扶持すべし、一椀の飯、一杯の酒、一塊の肉、さきてこれを愛撫する心あれば、部下は必ずなづくものなり。	卷一、四誓願篇忠節三八
㉘	口を嗜む者は治世には用ゐられ、乱世には刑戮を免るるものなり。	卷一、一般修養篇言辞尊重一三
㉙	人に超越せるものは、我が上を人に云はせて喜んで忠告を聞く、されど常人は我が一己の了簡にて事を済ます故、一段越えたる所なし。他人の忠告意見を納るるが、即ち人としての長所なり。	卷一、一般修養篇修行鍛錬一七

一時的な感情に振り回されることなく、落ちぶれた者や部下にも慈悲を持ち、平生から死を覚悟して、克己忍耐するよう求めた教訓が多いことがわかる。

(2) 婦道と武士道

「葉隠」は戦う軍人の生き方として受容されただけではない。女性の生き方にも影響を与えるものであった。中島いさ『婦道と武士道書葉隠』(1937年)は、福岡女専卒業記念出版の非売品で、自費出版にもかかわらず、佐賀県知事古川静夫が「真節修己」と題字を寄せ、洋画家の佐賀県師範学校教諭山口亮一が装幀を担当した。このような体裁で出版の運びとなったのには理由がある。

栗原荒野の序文によると、中島は福岡女子専門学校文科本科を卒業後、研究科に進み、栗原『葉隠の神髓』に学んで卒業論文を書いた。論文完成後、佐賀伝統の葉隠精神を日本婦道に取り入れるため、印刷して親戚・知人や教育関係者に配布したいという父親の意向により、栗原が目を通したらしい。「日本精神の本流に息づく葉隠精神を婦道化し母性化して、三つ児の魂、否胎内に芽ぐむ生命にまでも活を入れてかかるといふ事は、興隆日本の婦人の務としての第一義であり、優しく強い独特の精神を持つ伝統佐賀の女性の誇でもある」と信じていたからである。

本書は「第一章 葉隠の概要」「第二章 葉隠の神髓」「第三章 葉隠と婦道」の三章構成で、第三章は女子としての修養と母としての修養を論じている。はしがきで中島は「「葉隠は武士道だ、男の本だ。」とせず、葉隠のよき所を十分了解して、「今のこと、自分の事。」として、婦人は婦人として我が身に当てて、体得玩味

するならば、その精神は直ちに吾人の血となり、肉となつて、身心の修養鍛錬に役立つであらう」と述べている。

女性も新時代の女性らしくあらねばならないが、日本婦人には国体に合致した武士道的婦道があり、それは我が国の伝統的精神として、国民性を培ってきた武士道書から学ぶことができるというのが、中島の考え方であった。男女の別なく、その基底に共通した精神が国民性として流れているという理解は、男性性を強調するかにみえる武士道の考え方が、一面で性差を超えた側面も持っていることを示している。老若男女がそれぞれ自分の本分を全うし、国民として国の独立に貢献すべきであるという考え方にもつながるだろう。

(3) 他県教員による「葉隠」の学び

佐賀県以外でも、「葉隠」教育が行われていたことは、大森武雄『葉隠抄』（文岳堂出版部、1938年）からうかがえる。出版元の文岳堂出版部は兵庫県堺市にあり、皇国士道叢書として、山鹿素行の「武教本論」「武教小学」「士道抄」、石田一鼎「要鑑抄」、山本常朝「愚見集」、宮本武蔵「五輪書」、大道寺友山「武道初心集」、斎藤拙堂「士道要論抄」などを刊行している。大森は「明治維新の大業を翼賛し奉つた幾多俊秀の士、近くは満州、上海両事変に全国民感激の的となった、爆弾三勇士、錦西の野に護国の鬼と化した古賀連隊長、或は江湾鎮の花と散つた空閑少佐、等何れもこの葉隠精神の体現者であつた」と述べており、佐賀出身の軍人の「活躍」と葉隠精神を結びつけて考えている。

緒言から本書刊行の経緯がわかる。20年前、大森は神戸市立第一神港商業高校の生徒だった。校長の永田益一は典型的な佐賀人で、修身の時間にいつも「葉隠」の一節をひいていたという。大森は商業学校に教員として勤務し、第1次上海事変の翌年にあたる1933年8月、校長の命により佐賀県に出張した。そこで栗原荒野から教示を受けた。また、佐賀県下の小城中学の校長をしていた白井俊輔が、自ら「葉隠抄」を作って生徒に教えていることを聞いた。大森は、勤務校の校長にこれを伝え、その「葉隠抄」を教育の一資料として使い、普及実践を行ってきたという。その草案をもとに、大森は一般国民の修養に適切なものを抜粋摘録し、これを数節の徳目に分類し、すべてにふりがなをつけ、上欄に注釈を施し、一般読者の目にもふれるよう出版を考えた。「拳国一致、尽忠報国、堅忍持久以て神州日本の国威宣揚を図るの秋、明日の祖国の全運命を担って起つべき国民の教養今日より急なるものはなし」と思ったという。佐賀出身者が佐賀県内のみならず、神戸のような県外の学校でも「葉隠」を論じ、その影響を受けた者が「葉隠」関連書を執筆したというわけである。

序文を寄せたのは刊行当時、佐賀県女子師範学校長になっていた白井俊輔である。白井は「佐賀藩民性は日本国民性へと展開し、更に大義を四海に布く皇道大精神の活現にまで躍進せねばならなくなった」とし、葉隠の精神を現代の角度からとらえるよう主張している。本書は四誓願篇のあと、修行篇として項目別に葉隠の一節をまとめているが、その配列順と内容から、大森は「葉隠」本文そのものではなく、栗原『葉隠の神髄』を使って抄本を刊行したことがわかる。

第3章 「葉隠」の全国的普及

(1) 佐賀出身の著名な軍人たち

「葉隠」が全国に普及していったのは、池田賢士郎氏が指摘するように、五・一五事件や二・二六事件に、佐賀出身の軍人が多数荷担していたこともあるが⁽²¹⁾、陸海軍で目立った軍人に佐賀出身者が多く、彼等が葉隠精神の体現者であるとみなされていたことにも起因するのではないだろうか。『葉隠と誓願教育』は、佐賀師範学校専攻科学生36人の論考を集めて1938年3月刊行されたものだが、注目したいのは、「時局に活躍する著名なる葉隠人」の第一節でとりあげられている陸海軍将校たちである⁽²²⁾。師範学校生たちは、佐賀県が陸海軍人に特に多くの人材を有するのは偶然ではなく、「鍋島武士の間に先代から伝承された葉隠魂そのもの」があるからであり、殿様のためにすべてを捧げ尽くすという葉隠精神が、「今日そのまゝ上御一人に対する忠節として表れ、陛下の為には一身一家を鴻毛の軽きに比するといふ滅私尽忠の精神となつた」と考えていた。佐

(21) 池田賢士郎「近代の葉隠—その足どり 後編」『葉隠研究』77号(2014.7)。

(22) 佐賀師範学校専攻科葉隠研究会編輯『葉隠と誓願教育』(非売品、1938年)291～301頁。

賀藩領主鍋島氏と家臣との主従関係が、天皇と国民との関係にそのまま置き換えられていることがわかる。国家体制の違いや徴兵制の問題が意識されることはなく、生き方論・精神論として措定されているのが特徴と言えよう。

陸軍では、陸軍大将真崎甚三郎、陸軍大将緒方勝一、陸軍中将柳川平助、陸軍中将香月清司らの名前があがっている。真崎は日露戦争に出征し、陸大を恩賜の軍刀組で卒業し、ドイツ駐在、旅団長、師団長などを経て、1931年に台湾軍司令官になり、二・二六事件では軍法会議にかけられたが無罪となっている。緒方は重砲兵学校長、砲工学校長、造兵工廠長官などをへて陸軍大将となる。第一次世界大戦ではフランス軍に従軍して武勲をたてたという。柳川は陸大卒業後、支那陸軍大学教官として在任し、第一次世界大戦後の軍事視察で欧州へ出張、帰国後に騎兵学校長などを経て騎兵監陸軍中将になった。香月は陸大卒業後、欧米各国へ出張し、陸大教官などを経て旅団長、師団長、教育總監部本部長を歴任し、支那駐屯軍司令官となる。日露戦争では奉天戦に従軍し、駐在武官としてフランスに滞在中、第一次世界大戦で英仏連合軍に参加し、ベルサイユ講和会議には西園寺公望の随員として活躍した。このほか陸軍中将の大串敬吉や尾高亀蔵、陸軍少将の七田一郎や百武晴吉（海軍大将の百武三郎・百武源吾の弟）などの名前がみえる²³。

海軍では、海軍大将安保清種、海軍大将で侍従長の百武三郎、海軍大将百武源吾、海軍中将吉田善吾、海軍中将古賀峯一らがあがっている。安保は日露戦争出征後、イギリス駐在を経て国際連盟海軍代表、海軍次官などをつとめ、ロンドン軍縮会議には全権委員顧問となり、帰国後海軍大臣の地位に就いた。その後、軍事参議官、貴族院議員、内閣参議を歴任している。百武三郎は日清・日露戦争に従軍し、ドイツやオーストリア駐在を経て、第三艦隊司令官などをつとめ、海軍大将となる。1936年からは侍従長の任にあった。弟の百武源吾は日露戦争に出征し、国際連盟海軍代表、軍令部次長、海軍大学校長、第三艦隊司令官などを歴任した海軍大将である。吉田善吾は1937年当時、連合艦隊司令官兼第一艦隊司令官で、『葉隠と誓願教育』は「今東郷とも云ふべき頼もしい沈黙の提督」と評価している。古賀は、第一次世界大戦の青島攻略作戦に参戦し、フランス駐在武官、海大教官なども経験している²⁴。

陸海ともに世界情勢にも通じた優秀な軍人ばかりである。このほかにも人名はあがっているが、彼らが佐賀の誇りであると郷土の人々が自負していたことは確かだろう。

吉田善吾の海軍大臣任命を報じた、1939年9月1日の『東京朝日新聞』朝刊2頁では、「吉田中将の心身には佐賀の「葉隠れ武士」の気魄がみなぎつてゐる、佐賀中学時代上級生には百武源吾大将や同級には高田保馬博士などが机をならべてゐた、そのころから海相の頭脳明哲なことは早くも頭角を抜き秀才の誉れが高かつた」と紹介している。つまり、1939年9月までに、「葉隠れ武士」と表現すれば、人々が理解できる状況になっていたと考えられる。1932年3月の『日本及日本人』では「葉隠」に言及した者が皆無だったが、「葉隠」はその時からどのようにして全国的に知られるようになったのだろうか。

(2) 大木陽堂による「葉隠」関連書籍の相次ぐ出版

全国への「葉隠」普及過程を考えるにあたり、「葉隠」関連書籍を次々と出版した大木陽堂の功績は、大きいと言えるだろう。大木陽堂の著作一覧は【表2】を参照されたい。

大木の『葉隠論語』は1936年3月10日に50銭で教材社より刊行されたが、3月15日には早くも再版、4月2日に三版と、出版の勢いはすさまじかった。その後、『葉隠論語抄』とタイトルが変わる（ただし、外装の表紙には「鍋島秘書 葉隠論語抄本」、内表紙は「葉隠論語抄」となっている）。目次、ページ数、内容はすべて同じで、1939年11月15日刊行の『葉隠論語抄』奥付によれば、1936年12月10日10版、1938年6月15日20版、1939年1月18日30版、同年11月15日46版（46版以降は定価50銭）が出版されており、3年8ヶ月で46版というベストセラーであった。

本書の表紙には「佐賀の葉隠とは何か 本書がさきに空閑中佐古賀大佐江下伍長（いずれも死後に進級した

²³ 『日本陸海軍総合事典 [第2版]』。福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』（芙蓉書房出版、2001年）。以下、『陸将辞典』と略す。

²⁴ 『日本陸海軍総合事典 [第2版]』。福川秀樹編著『日本海軍将官辞典』（芙蓉書房出版、2000年）。以下、『海将辞典』と略す。

【表2 大木陽堂編著一覧】

書名	出版社	出版年	備考
鍋島論語葉隠全書 上巻	教材社	昭和 11 (1936) 年	
鍋島論語葉隠全書 下巻	教材社	昭和 11 (1936) 年	
葉隠論語	教材社	昭和 11 (1936) 年	のちに『葉隠論語抄』と改題
人の行き方	教材社	昭和 11 (1936) 年	
解説 福澤諭吉処世の書	教材社	昭和 11 (1936) 年	
現代語訳貝原益軒養生訓	教材社	昭和 11 (1936) 年	
鍋島論語葉隠読本	教材社	昭和 12 (1937) 年	
愚見集	教材社	昭和 12 (1937) 年	
宮本武蔵五輪書	教材社	昭和 12 (1937) 年	
人生と兵法	教材社	昭和 12 (1937) 年	
論語読本・生活と教養	教材社	昭和 12 (1937) 年	
人生のための兵法	教材社	昭和 13 (1938) 年	増補改訂版が昭和 15 (1940) 年に教材社から刊行
葉隠講話	三笠書房	昭和 13 (1938) 年	
成功者に学ぶ	教材社	昭和 14 (1939) 年	増補改訂版が昭和 15 (1940) 年に教材社から刊行
人生のための新論語	教材社	昭和 14 (1939) 年	
現代語訳葉隠全集 上	教材社	昭和 15 (1940) 年	
現代語訳葉隠全集 中	教材社	昭和 15 (1940) 年	
現代語訳葉隠全集 下	教材社	昭和 15 (1940) 年	
ここに道あり：葉隠物語 (青少年文庫 4)	日本青年館	昭和 15 (1940) 年	
良将言行録 (青少年文庫 14)	日本青年館	昭和 16 (1941) 年	
随筆武士道	教材社	昭和 16 (1941) 年	
闘戦経	教材社	昭和 18 (1943) 年	
葉隠修養訓	教材社	昭和 18 (1943) 年	

階級で表記されている一筆者注) 等を出した事実は有名だ！ 本書に依って護国思想の奥の奥を掴め！ 本書は人間をた、き直す力の本だ！」というメッセージが書かれている。大木陽堂『現代語訳葉隠全集』（教材社、1940年）の巻末広告には、「大木陽堂名訳『葉隠論語抄』四六判・和装・定価 50 銭一本書は葉隠の精神を例話によって現代人に最も解かりよく説いたもので大好評。三井物産の第一回五千部を筆頭に団体、会社等の大量注文殺到中」とある。

序文では、「葉隠」が「武士道の精華を説いたものであつて、日本武士道を語るにこの書の右に出づるものはないと言はれる」と述べ、1933年に全国府県知事が集まった宮中豊明殿での御陪食の際に、佐賀県知事が古賀中佐、空閑少佐、爆弾三勇士にふれ、「彼等は戦地に於て遺憾なく、此の伝統的葉隠精神を發揮したものとして、県民齊しく感奮興起し」としていると触れたことを紹介している。そして、「『葉隠』が今や佐賀の『葉隠』でなくして、日本の『葉隠』たらうとしつつあるのは、実にこの故である」と述べている。

大木自身が断っているように、本書は栗原『葉隠の神髓』に依拠している。三標語として栗原の「真剣に、頑張れ、仲よく」が紹介されるだけでなく、「葉隠」の「殿様中心主義と諸人一和」を「皇室中心と拳国一致」、「国学心懸くべし」を「日本の国史を知れ」「建国精神に還れ」と読み替えている点なども同じである。「『葉隠』空閑少佐」という項目で、空閑が「葉隠」の気に入った章句に、赤鉛筆で傍線を引いていた部分の原文が紹介されているが、それも栗原本を写したものである。

それでは大木陽堂のこの本がベストセラーになったのは、どのような理由によるのだろうか。栗原『葉隠の神髓』は、「葉隠」全巻 1300 余りの項目から 741 節を選び、四誓願、一般修養、実話逸事、史蹟伝説の四篇に分類し、原文を収録した作品である。定価 3 円、609 頁で、取次所は大坪書店、発行所は郷土佐賀社内にある葉隠精神普及会、印刷所も佐賀印刷社で、いずれも佐賀市である。また地元佐賀の代表的な軍人や政治家、文人らによる題字、題句、題歌、序文を冒頭にかかっている。元帥陸軍大将男爵故武藤信義—1932 年に関東軍司令官兼特命全権大使兼関東長官、1933 年に元帥となるも同年死去—の題字「智仁勇」、詩歌同人の「ひのくに」を主宰していた中島哀浪が詠んだ題歌「真剣に頑張れ伸よく葉かくれのこの心ありて国おこるべし」、大隈内閣で通信大臣、大蔵大臣を経験した武富時敏の筆による四誓願や、陸軍大将真崎甚三郎の「白雲や只今は是にたつねあひ」の揮毫が収録され、佐賀県知事藤岡長和が題句と序文を、徴古館長の西村謙三も序文を寄せている。

対して、大木『葉隠論語（抄）』は 100 頁ほどの小冊子であり、東京の教材社から定価 20 銭、送料 2 銭で販売され、一般大衆を讀者に想定して売られた。「葉隠」感話として、合計 76 の話が 1 頁に 1 つくらいの分量で紹介されている。「柳生流兵法の極意は死ぬ事」「諫言は人に知られぬ様に」「奉公は好き過ぎて過ちあるが本望」などのタイトルが目次に並び、手に取りやすい体裁で、平易な現代語で説明されている。以上のような体裁や文体、想定読者層や新聞広告による宣伝効果もあって、ベストセラーになったのだろう。

同年、大木陽堂は『鍋島論語葉隠全書』上下巻（教材社、1936 年）も刊行した。上巻は 11 月 1 日、下巻は 12 月 1 日発行で、どちらも初版 3000 部、定価は各巻 2 円である。上巻の跋文は、山本常朝の家中野神右衛門の後裔にあたる中野礼四郎が書いており、佐賀での全集出版に続いて、教材社から全集が刊行されるのは、「葉隠精神普及の為め否社会人心作興の為め」喜ばしいと述べている。また下巻には頭山満の書「忠君愛国」がかかげられている。中村本が書き下し文のみ収録しているのに対し、大木の『全書』は書き下し文のあとに語句の注、解説をつけている。

「はしがき」には、「海軍少将向田金一閣下、中村郁一氏、栗原荒野氏、角田貫次氏、野口静雄氏等の著述及び談話に負ふところ多かりしを附記して、感謝の意を評す」とみえるので、中村郁一と栗原荒野の書籍を参考にしていることがわかる。向田金一は石川県出身で海兵、海大を卒業し、日露戦争に出征した人物で海軍大学校教官、海軍兵学校教頭兼監事長などを経て 1926 年、海軍少将になっている²⁵⁾。のちに松波治郎『葉隠武士道』に題字を寄せる人物でもある。

角田貫次は、古山省吾編『両羽之現代人』（両羽研究社、1919 年）に山形の名士—当時は住友倉庫東京出張所々長—として登場する。父は庄内藩士で儒者であり、自身も志願兵の経験をもつ一方、書家・漢学者でもあった。吉田松陰の「講孟箴記」を校閲した『校訂講孟箴記』上・中・下（長野インキ商会、1933 年）、『葉隠抄』（国維会青年部版、1934 年）も刊行している。もう一人名前があがっている野口静雄は、角田より 1 年先に『講孟箴記』（金鶏学院、1932 年）を著している。角田と野口はともに金鶏学院と関係していた人物だった。

さて『鍋島論語葉隠全書』上巻の「はしがき」で、大木は「今や、時代の日本人が求めるものは、実に「葉隠」の真理であり、理想である。己れを捨て切つて国家の意志に合体せんとする決意への指導である。「葉隠」は、これが方向を示し、魂の充実と発展とに、よく応へうる書である。大和魂の集積、日本精神の具体化である」「魂へづんと来る誠実の征矢—これが眞の日本精神だ」と記している。

全書は四六版、朱函入上製で合計 1100 頁余りに及ぶ。1937 年 9 月 9 日の『東京朝日新聞』朝刊には、「鍋島藩の秘本はがくれ論語の原本全十一巻の全内容を網羅し之れに千枚の解説を加へた国宝的出版」といううたい文句がみえる。1938 年には「戦捷記念版」4800 部が定価各 88 銭、つまり 56% 割引価格で売られた。1938 年 10 月には日本軍が広東を、つづいて武漢三鎮（漢口・武昌・漢陽）を占領し、11 月には近衛文麿首相が東亜新秩序建設の声明を出したので、戦況と連動して「葉隠」の売り込みが加速していったと考えられる。同年 11 月 25 日の『東京朝日新聞』の宣伝では、「諸会社学校青年団等から注文殺到 製本屋も印刷屋も昼夜兼行」「支那大陸に雄叫びを挙げた日本軍の実力は世界各国の驚嘆的であるがこれこそ古来何千年の間我々を培つ

²⁵⁾ 『海将辞典』。

た武士道精神の顕現である」とみえる。

「古来何千年の間我々を培つた武士道精神」とあることから、「葉隠」を日本近世の武士道論としてではなく、古代以来の「武士道精神」—大和魂・日本精神と同義で使われている—の顕現としてとらえていることがわかる。「葉隠」は近世の幕藩体制のもとで記述され、内容もまたすぐれて近世的なのだが、そのような歴史的観点は捨象されている。1940年6月段階でこの全書は6版が刊行されている。「葉隠」の聞書三以降は、歴代藩主や家臣たちの事績など、歴史書としての色彩が濃いのだが、書名に「鍋島論語」とあるように、人生の教訓、生き方論として人々に受容されたのである。

大木は以後も、積極的に「葉隠」関連書を執筆した。『葉隠全書』刊行の翌年、大木陽堂註『鍋島論語葉隠読本』（教材社、1937年）を四六上製廉価版232頁で、定価1円で出版した。葉隠全書に収められた全11巻1300余節から、特に葉隠精神の神髄といわれる280数篇を選び、それに注釈を加えたものだった。1937年9月9日の『東京朝日新聞』朝刊には、「喜んで死ぬる魂の糧 如何なる敵の機械装備にも日本が必ず勝つ方法の一つ、即ち義務からもう一步踏み出した義勇（石原莞爾少将閣下も之を強調してゐるやうであります）の二字であります。義勇は武士道の玉碎主義、生死の観念を超越した葉隠精神に尽きると信ずるのであります」と宣伝されている。

機械装備に対抗するのは精神、具体的には義勇であり、それは玉碎主義、葉隠精神に尽きると強調し、第1次上海事変の軍人ほか、佐賀出身の香月中将、牟田口部隊長、倉永部隊長の「活躍」が注目されている。前節でふれた香月清司は、1937年当時、盧溝橋事件の処理で、支那駐屯軍司令官として天津に着任するものの、支那事変に拡大したため、同年第一軍（北支那方面軍）司令官になっていた。牟田口廉也は、盧溝橋事件時には支那駐屯歩兵第一連隊長だった。倉永辰治は、支那事変で歩兵第六連隊長として出動し、1937年8月29日に戦死した²⁶。本書もまた売れ行きがよく、1937年10月時点で早くも4版になっている。

大木は山本常朝『愚見集』（教材社、1937年）のあと、『葉隠講話』（三笠書房、1938年）を刊行した。1938年11月23日の『東京朝日新聞』朝刊の書店広告欄では、戦時廉価版で「大增刷出来!!」とあり、「文藝春秋」九月号から「葉隠」に関する菊池寛、渡邊世祐博士、吉川英治の談話が抜粋されている。菊池寛は、「武士道とは死ぬことと見付けたり」が武士道の根本精神を把握しているとの見解を示し、「葉隠」を推奨している。

(3) 松波治郎の「葉隠」解釈

1938年12月に1円20銭で刊行されたのは、松波治郎『葉隠武士道』（小山書房、1938年）である。松波治郎は岐阜県生まれの作家で、主に戦前・戦中に活躍した。『葉隠武士道』（小山書房、1938年）、『葉隠武士道精神』（一路書苑、1940年）、『水戸学と葉隠』（創造社、1944年）、『大楠公教書』（宮越太陽堂、1940年）などの著作がある。

題字を寄せたのは、海軍大将で男爵の安保清種と海軍少将向田金一であった。安保清種は「尽忠」、向田金一は「葉隠精神の古歌」として、「みるひとのためニハあらてをくやまに己か誠を咲く桜かな」とうたっている。

序文は武富邦茂海軍少将で、「『葉隠』位徹底した武士道は他にあるまい。之を軍部側から見れば攻撃精神の徹底せるものといひ、銃後国民側から見れば尽忠報国の徹底せるものといひ、大乗的国策の見地よりすれば大慈悲心の徹底といふべきであると信ずる」という言葉を寄せている²⁷。

著者の序文によれば、本書は海軍省教育局の「思想研究資料号外」のほか、友人の大木陽堂による『葉隠論語』『鍋島論語葉隠全書』によっているとのことで、大木陽堂の影響がうかがえる。本文は「葉隠の極意は徹底主義」「死の哲学」など、平易なタイトルをつけた76項目から構成されている。たとえば、「葉隠の極意は徹底主義」の冒頭では、昭和3年の東方会議の折、関東軍司令官をつとめていた武藤信義の逸話を紹介し、葉隠の徹底主義が語られている。「死の哲学」では、デカダンやナンセンスが流行していたところ、支那事変の勃発により死を恐れぬ精神、すなわち「武士道といふは、死ぬ事と見附たり」に代表される日本精神が発揮さ

²⁶ いずれも『陸将辞典』。

²⁷ 武富邦茂は海兵卒で、1930年に軍令部出仕兼海軍省出仕、1935年に海軍少将、同年12月に予備役。『海将辞典』。

れたとする。本書は202頁の四六判で、大木の著書と同じく人気があったらしい。1939年1月18日の『東京朝日新聞』朝刊広告文には、「説くところは言々句々すべて武士道の極意であると共に現世の要訣たらざるはなく、「飽くまでやり通す」の徹底主義こそ其の真骨頂」「大好評・再版出来」とあるので、12月発売の本が1月には再版されたことになる。松波はこの本に加筆し、1940年11月に四六判238頁、1円50銭で『葉隠武士道精神』（一路書苑）を刊行した⁽²⁸⁾。

『葉隠武士道精神』には当時の時代背景が見事に反映されている。「大東亜共栄圏の曙光を仰ぎつゝ」、松波は序文で「今や世界に歴史あつて以来嘗つてなき大転換の時期に於て、私は「葉隠」の有つ、強靱な、肺腑を衝く迫力を一層強調せざるを得ない。既にして大政翼賛の光榮を担ふ吾人は、その豁然として大悟する處を更に拍車をかけて堂々大歡喜の進軍譜を奏せねばならないのである」と断言する。

また1938年版にはなかった28項目が追加され、202頁から238頁へと分量も増えた。まず冒頭に「徹底する處に勝あり」「不徹底は怯懦なり」「武士道は日本国民の性格なり」の3項目が追加された。徹底する處に絶大な力が存在するのであり、それは「興亜の聖戦」における壮絶悲絶の話に表現されているという⁽²⁹⁾。

さらに「弁護を要しない凜然たる正道、云ふ必要がない美しさ、それが日本国民の姿」であり、日露戦争後に重野安繹が述べた「武士道は日本の国体と云ふ程のものである」の言葉を引用し、武士道は武士のものではなく、古来からあった精神が武家時代に武士道と称されたに過ぎない、とする。武士道の精神を實踐する日本魂は、七転び八起きの精神にもとづく徹底であると主張している⁽³⁰⁾。

したがって「葉隠」本文も現代的に解釈される。試みに、「葉隠」の書き下し文と、松波治郎の現代的解釈を並べてみよう。

奉公人は一向に主人を大切に歎くものなり。これ最上の被官なり。御当家御代々、名譽の御家中に生れ出で、先祖代々御厚恩の儀を浅からぬ事に存じ奉り、身心を擲ち、一向に歎き奉るばかりなり。此の上に智慧、芸能もありて、相応くの御用に立つは猶幸なり。何の御用にも立たず、不調法千万の者も、ひたすらに歎き奉る志さへあれば、御頼り切りの御被官なり。智慧、芸能ばかりを以て御用に立つは下段なり。

日本国民たるものは、たゞ 陛下の御為、日本皇国の為、こればかりを願ふものが最上の国民である。世界無比万世一系の皇国民と生れ来て、先祖代々から、御歴代天皇の御恩寵を忝うし、今日に到つた此の有難さに感泣して、身心を擲つて、たゞ一心、君国に報ずるばかりである。尚その上に学問、才能があつて、自分相応の國家の御用に立つことが出来れば幸であるが、たとひ何の御用にも立たぬ身、不調法千万の身であつても、たゞたゞ報国の念に燃ゆるものであれば、それで立派な日本国民である。学問や芸能ばかりで御用に立つのは下の下である。これは外人の雇教師みたいなものである。学問や芸能が先きで、根本の忠を忘れたものは日本国民とは云へない。君国に報ずるの念からの学問、芸能であつて、自分の欲望を達する為の学問、芸能であつたり、学問、芸能の為の学問芸能であつてはならないのである。⁽³¹⁾

鍋島氏と家臣は天皇と日本国民に置き換えられ、鍋島家への忠義は日本皇国への忠義に読み替えられている。このような読み替えが、違和感なく行われたところに、太平洋戦争直前の日本の時代状況が反映されていると言えよう⁽³²⁾。

(28) 1942年刊行の戦時普及版『葉隠武士道』の内容は、『葉隠武士道』初版に加筆された『葉隠武士道精神』なので、注意を要する。

(29) 前掲『葉隠武士道精神』3頁。

(30) 同右、10～13頁。

(31) 同右、24～26頁。

(32) 武士の主従関係と、天皇と国民の関係をアナロジカルにとらえる素地を理解するには、軍人勅諭、教育勅語、国民道徳論などの検討が必要だが、後日を期したい。

おわりに

「葉隠」はもともと、修養書的性格と歴史書性格の二面をあわせ持っていた。ときには諫言に対して、切腹すら命じる主君に苦勞しながら、御側仕えの奉公のあり方を具体的に述べた「葉隠」の前半部分が、主に「鍋島論語」のイメージを作り、後半部分で取り上げられた藩主・藩士の事績から、葉隠精神の具現化とみなせる事例が選ばれ、紹介された。さらにその「読み」の手法は、当時の軍人や中世武士にも適用され、「発見」された葉隠精神は、歴史貫通的な精神へと昇華されていく。

このような読み替えには、佐賀出身軍人の戦地における行動が与えた影響が大きい。彼らの戦功は演劇や映画、歌や琵琶などで賞賛され、追悼会・慰霊祭が実施され、人々の記憶に残るものとなった。「軍人の活躍に息づく葉隠精神」という文脈で、「葉隠」は佐賀で取り上げられた。それに目をつけたのが、大木陽堂である。彼は東京の出版社から、全国の一般大衆に向けてわかりやすくその内容を説いた。そして「葉隠」の関連書が次々と出された。当時の佐賀出身の陸海軍人による実践は、葉隠精神の具体的表現であると解釈され、「葉隠」自体が時間を超越した、日本民族の根底に流れる精神の表現として読み替えられていく。

「葉隠」という作品の性格、佐賀出身軍人の「活躍」、佐賀の郷土愛とその発信、「日本精神」を求める当時の識者や国家政策、それに乗じたマスメディアや興行界、同調する「愛国的」有識者などの動きが複雑にからみあった結果、「葉隠」の存在は1930年代に知られるところとなり、日本民族の精神の発露として読み替えられ、佐賀の「葉隠」は日本の「葉隠」へ変貌していくのである。

「葉隠」の本格的普及は1940年以降のことになる。1940年には大木陽堂が現代語訳を出版し、『大日本文庫第14 武士道集中巻』（大日本文庫刊行会）が、井上哲次郎校訂「葉隠」抄録を収載し、和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』岩波文庫版の上巻が刊行される。1941年1月8日には、東条英機陸相が「戦陣訓」を下達し、同日の『朝日新聞』朝刊7頁に掲載された東条の談話では、「葉隠論語」に言及している。井上哲次郎・中山久四郎共著『戦陣訓本義』（広文堂書店、1941年）では、戦陣訓本訓「其の二」の「第七 死生観」の説明で、「鍋島藩の武道訓として名高い『葉隠』に、武士道とは死ぬことゝ見つけたりといひ」という記述がみえ、井上哲次郎監修『武士道全書』第六巻（時代社、1942年）には「葉隠」が抄録された。次稿では1940年代前半の「葉隠」受容について考察したい。

【付記】 本研究は平成26年度～28年度科学研究費補助金・基盤研究（B）（研究代表者：谷口眞子）「軍事史的観点からみた一八～一九世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」（研究課題番号26284089）、及び早稲田大学の2018年度特定課題研究助成費（特定課題B）（研究代表者：谷口眞子）「越境する軍事史—19世紀を中心とした人と学知の交流」（課題番号2018B-045）による研究成果の一部である。